

機関番号：11301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520275

研究課題名（和文） サルトル演劇に見るモラルの研究

研究課題名（英文） Study on Morality in Sartre's Theatre

研究代表者

翠川 博之 (MIDORIKAWA HIROYUKI)

東北大学・大学院文学研究科・専門研究員

研究者番号：60436061

研究成果の概要（和文）：本研究は、サルトル演劇の分析を通じて「対話のモラル」を提起するものである。暴力は他者を支配しようとする主体の欲望から生じる。したがって、人間関係を規制する倫理は絶対対等な人間関係に基づいて構想されなければならない。本研究では、個人の自律性を損なわない対等な関係性を「遊戯的關係」というモデルで明示している。「遊戯的關係」に基づく「遊戯的対話」は規範を創出する自由な相互活動である。

研究成果の概要（英文）：This research aims at drawing out “the morals of dialogue” through the analysis of Sartre's drama. Violence is derived from a subject's desire to rule others. Then, ethics to regulate human relations should be designed based on absolute equality. This study proposes “relationship of play” as a model of an equal relationship which would not hurt personal autonomy. “Dialogue of play,” which means a dialogue based on the “relationship of play,” is a mutual and free activity to create rules.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	1,600,000	480,000	2,080,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：フランス文学・思想

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：サルトル、モラル、倫理、演劇、遊戯、対話

1. 研究開始当初の背景

（1）サルトルがモラルに関する哲学的著作を生涯に少なくとも三度構想したことは、晩年の対談で自身が証言している。だが、これらの企てはすべて中断あるいは放棄され、生前、まとまった著作として刊行されることはなかった。その遺稿群の研究が内外の専門家によって進められているなかで本研究が目指したのは、遺稿とともに彼の演劇作品に注目し、戯曲を構成する対話の分析を通じて「対話のモラル」を構想することである。

（2）なぜ演劇作品を対象としなければならないのか。その理由は遺稿群の考証が進んで

明確になったサルトルのモラル論に固有の問題にある。倫理を構想するサルトルは、いずれの時期においても、「実存は本質に先立つ」という自身の存在論の帰結から、言い換えれば、「対自はいかなる本質によっても規定されず自由である」という前提から出発する。彼が「対自の自由」以外に人間存在を規定する「本質」を認めないとすれば、その倫理が一般に予想されるような超越的・絶対的規範を導入しえないことは明らかであろう。一方、倫理法則が、行為の指導原理として要請され受容される規範を内包するものであるかぎり、それは必然的にこの自由に拘束を加える規則となり、「対自の自由」を基盤と

するモラル論に矛盾を生じさせることになる。さらに、サルトルは「対自の自由」の対立項をまず他者におくために、一歩進んで倫理を提示するには、「自由」である対自相互がいかに倫理的に共存可能かという問題をも解決しなければならない。

サルトルの演劇作品は、具体的状況、具体的人間関係における主体の自由を常に主題とし、倫理を構想するサルトルの思考実験の場となっているのである。

(3) 以上を背景に、可能な倫理を展望するために着目したのが「演技／遊戯 jeu」という概念である。『存在と無』でサルトルも認めるように、「遊戯」とは規則を創出する自由な相互活動である。また、彼のいくつかの演劇作品には、登場人物どうしが協調的関係を築き、対話を通じて個人的行為の意味を共同の意味としてとらえ直してゆく過程が示されている。戯曲の分析から「演技／遊戯」に新たな意味づけを行うことで、規範や価値の共同創出を焦点とする倫理、実存主義的存在論に依拠したモラルを再構築することができる。本研究はこうした見通しに立って開始された。

2. 研究の目的

(1) 人の言行を倫理的に規制する諸規範は、生の具体的状況において、「対話」を通じてそのつど創出され得ることを検証し、そこから析出される一定の対話型を倫理規則の創出モデルとして明示すること、定式化すること。

(2) 実存主義的倫理学を定位する過程において、規範倫理学を代表する二つの立場、功利主義と義務論の妥当性を批判的に検証すること。

① ベンサムを先駆とする功利主義は、社会の幸福（快樂および苦痛の欠如）を最大限にすることを目的とし、個人の行為はその帰結として、社会の幸福の増大に寄与する場合に正当化される。本研究においては、「権力」としての社会・集団が個人の生を疎外する相を戯曲の読解から具体的に示す。

② カントに代表される義務論は、内的動機の正しさに基づいて行為の正当性を判定する。その内的動機を基礎づけるのは、普遍的理性によって導かれる規範の普遍的妥当性であり、それが絶対の当為・定言命法と定義されている。本研究では、実存主義の立場から、倫理規範の絶対化は、生の具体的状況を深く掘り下げる努力を最初から排除してしまうこと、その本質主義が具体的生を疎外することを批判する。また、戯曲の分析から、理性をさらに基礎づける倫理の基盤が、具体

的他者の具体的痛みに対する共感にあることを示す。

3. 研究の方法

(1) サルトルの演劇作品の全体を個別のテキストの集積としてではなく、有機的な関連性をもったひとつの世界として読解する。個々の戯曲はそれぞれの主題をもつが、倫理学草稿群を中心とする多様なジャンルのテキストから見いだされる倫理構想やそれが含む概念は、各主題を横断しているからである。

(2) モラルの主要概念の変遷を時系列に沿って考察することを基本とするが、この規則を必ずしも絶対視しない。なぜなら、サルトルが演劇形式で実践している考察（登場人物を極限状況におき、そこで登場人物の行為の意味を考量する）が、哲学テキストにおける思想とは矛盾していたり、後から哲学的著作に反映されたりする例が少なくないためである。

(3) サルトルの倫理思想に新たな解釈の可能性を開くことが、思想を戯曲から読み解くことの最大のメリットである。したがって、思想を整理分類するのではなく、諸概念の「変容」や「融合」、「矛盾」に焦点をあてつつ、こうした定かならぬ思想を演劇テキストの読解と関連づけて全体化する。

(4) 演劇テキストの読解は、戯曲を構成する対話の分析を主要な方法とする。方法論として語用論、グレゴリー・ペイトソンやオイゲン・フィンクらの遊戯論を用い、対話の構造および対話を基礎づける人間関係の構造を明確にする。

4. 研究成果

(1) サルトルの演劇作品の精読から得られた成果として、これまでほとんど言及されなかったことのないサルトル演劇の特徴が明らかになった。

従来、サルトルの演劇は古典的劇作法のなかでもとりわけ「逆転」と「認知」の二要素が巧みに配置されていることで一定の評価を得てきた。アリストテレスの『詩学』によれば、「逆転」とは登場人物の行為の方向が正反対に転じることであり、「認知」は無知から知への転換、隠されていたものの発見を意味する。こうした「逆転」と「認知」が、サルトル演劇では、「登場人物どうしを結ぶ隠れた関係の認知」による「逡巡から決定的行為への転換」として構成されている。サルトル演劇第一の特徴は、その「認知」が不意

の事件や偶然の出来事によってもたらされるという古典的手法によってではなく、登場人物の対話によってもたらされる点にある。「対話」が人物の性格に従属しない「思想」を形作り、思想の生成がドラマの動因となる。サルトルの演劇作品は思想が特権化された「対話の劇」なのである。

サルトル演劇第二の特徴は、人物造形の新しさにある。サルトルの戯曲に登場するのは、古典劇に見られるような優れた人物、高貴な人物ではなく、近代心理劇のように性格が固定された人物でもない。彼の戯曲に登場するのはすべて「分裂した人物」である。この「分裂した人物」の内面が他の登場人物の言葉で表出され、対立や矛盾をはらんだ「思想」を形作る。

第三の特徴は「思想」の未完結性である。サルトルが自作解説でしばしば述べているのは、戯曲の制作が自身の思考の装置となっているということである。登場人物を極限状況に置き、そこで人物が交わす対話と行為の意味を考量する場として戯曲が構想されているのである。サルトルの演劇作品がときに誤解を招くのは、設置された極限状況や極端にデフォルメされた人間関係、また「対話」を通じて表出される登場人物の錯綜した思考に彼の哲学思想の決定的表現を見ようとすることに原因がある。劇の結末で表現されているのは寓話のような単純な教訓ではない。戯曲の「思想」には観客の批判的再考察を促すような、現実世界に対する異化効果が備わっているのである。

第四の特徴。それは、50年以降の戯曲制作に取り入れられた「回転装置」である。「回転装置」は「クレタ人であるエピメニデスはすべてのクレタ人が嘘つきだと言う」、あるいは「わたしは嘘をついている」というパラドクスに典型的な、否定の自己言及を含んだ不断の循環システムである。サルトルはこれを登場人物の思考に、登場人物どうしの対話に、劇場における観客とのコミュニケーションに、つまり演劇を構成する言葉のあらゆるレベルに設置することで、演劇空間を構成する人間関係の諸相を刷新している。本研究が提起する「遊戯的關係」および「遊戯的対話」はこの「回転装置」から派生するものである。サルトル自身の定義によれば、倫理は「人間関係を規制する」。人間関係を主題的に考察するにあたり「回転装置」が設置された戯曲が重要な考察対象となった。

(2) サルトルの演劇作品がしばしば哲学思想の翻案、下位に属するものと見なされるのは、初期の戯曲『蠅』(1943)および『出口なし』(1945)の影響に負うところが大きい。人間存在において実存が本質に先立つことを明記した『存在と無』(1943)において、

サルトルは、いかなる本質によっても規定されない対自存在を「自由を存在する」と規定した。しかし彼はまた対自の自律性を脅かす存在として、他者を対自と相克関係にあるものととらえ記述したのである。初期の戯曲2篇には彼のこうした思想が色濃く反映されている。考察から明らかとなったのは、自由な対自による「我有化」が人間関係を疎外するという、戯曲における人間関係の構造である。「我有化」は主体の自由の実現として、他者の自由の所有、力による支配によって達成される。権力主体が究極目標とするのは、他者の自由意志に基づく自発的な自由の放棄、すなわち隷属である。初期の戯曲に見られる人間関係は総じて、主体が他者に及ぼす権力関係によって動機づけられている。

語用論を方法論に用いた対話分析から、この関係に生じる対話型については以下のように要約することができる。第一に、発話者の言葉は、メッセージの受取人として具体的な他者を想定していないこと。他者にとって意味が必ずしも明確でない独白のような形態をとって発話されること。第二に、発話は、発話者本人が他者に差し向けたメッセージとしてその受信者においても聴取されないということ。メッセージは、発話者の言葉としてではなく、第三者の言説としてあるいは一般化、あるいは特殊化されてしまう。したがって、第三に、対話の相互性がこの関係においてはいかなるかたちにおいても確保されない。

ただし、代表作とみなされる『出口なし』について、後年のサルトルは、自分が戯曲で示したのは人間関係が不調である場合の極限状態であり、対自の自己認識に他者が不可欠の契機であることは自明であると述べている。事実、彼のその後の作品にはこの発言を裏づける思想が示されている。

(3) 1947年から翌年にかけて執筆された草稿『倫理学ノート』(1983刊)には、『存在と無』で「我有化」の一形態と考えた「贈与」の概念を、あらためて肯定的にとらえ直そうとしていたサルトルの思索のあとがうかがわれる。『文学とは何か』(1943)で提唱された、言語を手段として状況を暴露し、状況を客観化することを読者に呼びかける文学、いわゆる「呼びかけとしての文学」も、作家による「贈与」の一形態であると考えられる。しかし、1951年に初演された『悪魔と神』では、一登場人物の発言を通じて、「贈与」とは人間関係に負債を導入するもの、負債によって相手を隷属させるものだと再否定される。サルトルがこの戯曲を通じて批判しているのは、「贈与」をも含めた人間関係を疎外する諸制度であり、とりわけキリスト教における善、義務や価値が主要な批判対象となっ

ている。

主人公ゲッツは、はじめに絶対の悪を、次に絶対の善を行為において実現することを目指し、ついに善が実現不可能であることを悟って絶対者・神の存在を否定するに至る。ゲッツが絶対の悪も絶対の善もなしえない人間への「回心」に導かれるのは、彼の行為を冷徹に評価する僧侶ハインリッヒとの対話を通してである。

ともに社会から疎外され、帰属する集団をもたぬ「私生児」であることを自覚するゲッツとハインリッヒには、相互の立場への共感があり、この共感をもとに現実の利害を離れて対等な関係が成立している。相手への共感を深めつつ相手の敵対者を演じ、言葉の矛盾をついて相手が用いた言葉で相手を攻めるこの対話には、しだいに一定の規則が生じてくる。論理の逆転や語彙の反復といった、言葉のやりとりにおける即興的規則が、「これは遊戯である」というメタ・メッセージとなり、遊戯を協働的に遂行する意志によって対話が維持される。本研究では「遊戯的対話」を可能にするこうした関係性を「遊戯的關係」と定義し、「遊戯的關係」に基づく「遊戯的対話」が倫理的価値の相互創出を可能にする対話型であることを検証した。

この戯曲にはまた「遊戯的対話」と類似の構造をもった別の対話型が示されている。ゲッツと彼に愛情を抱く情人カテリーナとの間で交わされる対話がそれである。ゲッツから与えられる愛撫はカテリーナにとって彼の愛情を信じさせる根拠となるが、その一方、彼が彼女に与えるのは愛情を否定する無情な言葉である。相手に与える行為と言葉とが矛盾するこの対話構造は、ペイトソンのいう「ダブル・バインド」そのものであり、コミュニケーションに暴力をもたらす。ゲッツとカテリーナにおいては、彼女に愛情を抱くことなく単に性的欲望の対象として所有するゲッツと、彼を愛するゆえに自ら関係を断つことのできないカテリーナの非対称的な立場からこの関係性が生じている。対話を暴力に変える「権力関係」は、自由によって自由を放棄させる支配、「我有化」によって動機づけられているのである。

神の存在を否定するに至ったゲッツは、対話によって導かれたこの帰結を頑なに受け入れようとしないハインリッヒを殺害する。その後、一人の人間として農民戦争に加わることを決意したゲッツに、『実存主義はユマニズムか』（1945）で表明されたサルトルの「アンガジュマン」の思想を読み込むことは容易である。しかし、ハインリッヒの殺害を肯定し得るような論理を「アンガジュマン」の概念は含んでいるだろうか。自分を士官として迎え入れることを拒む兵士をゲッツが殺害したことについても同様の問いが立て

られる。問題なのは、集団にとっての善を個の犠牲のうえに肯定するような功利主義的思想の妥当性であろう。神による支配を脱したとはいえ、人間による人間支配の開始が暗示されて終わる本戯曲は、サルトルの倫理思想を全的に表現したものとはいまだ言えない。一定の集団（国家、市場、共同体、党派、家族あるいは「人間」という普遍概念）が個人を統治するその構造について、さらなる問題提起がなされているのである。

（4）集団と個の関係性は 1950 年以降、サルトルの主要な考察対象となってゆくが、この主題が戯曲において最初に取り上げられたのは、1946 年に初演された『墓場なき死者』においてであった。ドイツ占領下、親独派の民兵に捕らえられたレジスタンスのメンバー 5 名がこの劇の主要登場人物である。レジスタンス組織に関する情報を自白させようと民兵が彼らを順次拷問にかけてゆくなかで、メンバーの一人アンリは、拷問に耐えられそうもない年少の仲間フランソワを殺害してしまう。その後、彼は自らの行為の正当性について倫理的逡巡を重ねるが、レジスタンスのメンバーはいずれも敵の手にかかり戯曲の結末において死ぬ運命にあり、彼の逡巡には結局答えが示されてはいない。

戯曲の主題を構成する「拷問」は、『存在と無』をはじめ『文学とは何か』でも繰り返し言及されたサルトルの倫理構想における特権的主题である。「拷問」とは拷問の被害者に自由意志から自由を放棄することを強いる「我有化」の極限形態であろう。1965 年に行われる予定だったコーネル大学での倫理に関する連続講演の草稿「モラルと歴史」でも、サルトルは実在したレジスタンスの闘士への「拷問」を俎上にのせているが、ここでは拷問に耐え抜いた彼らの態度が「倫理的徹底主義」と名づけられ、その心理が分析されている。「倫理的徹底主義」とは、自らの存在を「内面性の純粹主体」とするために、「身体をもつ」という存在の事実性を「内面」に対する「外的」な一事実に過ぎないものと見なし、生命をも目的遂行の手段にしてしまう態度である。拷問で口を割らないために投身自殺した『墓場なき死者』のソルビエという登場人物は、ピエール・ブロンレットという実在の人物をモデルにしていたであろうことはこの草稿から推察される。

「拷問」をめぐるサルトルの思索過程を考察すれば、彼の倫理学を基礎づける絶対の価値が生命におかれていないことが分かる。しかし、そこからは二つの疑問が生じる。第一は、自由を護持するために他者を殺害することは正当化されるのかという問い。第二は、個人は常に「内面性の純粹主体」であり得るかという疑義である。現にサルトルは「モラ

ルと歴史」において、一定集団の制度や習慣、価値がどれほど無自覚に主体に内面化されているかを論じている。『墓場なき死者』におけるアンリの自問は、まさにこれらの問いを集約しているのである。

(5) 『アルトナの幽閉者』(1959)にこれらの問題を解く鍵がある。大会社の相続者にして、大戦中ナチス将校として拷問を行った主人公フランツは、戦後、自室に籠もり、自らの行為の意味を自問し続けている。フランツは拷問の執行者であると同時に、アンリの倫理的逡巡の後継者であると言えるだろう。

戯曲は行為の動機の発見めぐる展開し、ついに彼は自分の行為を動機づけていたものが、自己の自由を護持するために他者の自由を侵す「我有化」への意志であったことを自覚する。「我有化」が他者ばかりでなく自己の自由をも疎外することに思い至る主人公の自覚は、父親との対話によって導かれるが、この対話型もまた「遊戯的対話」である。

会社の所有者と後継者として対等な関係にある父子であるが、その対話は最初まったくかみ合わない。彼らの遊戯的対話は、主張において常に相手の反対者の立場を演じることを暗黙の規則として開始される。しかし、対立のための対立を演じる彼らの対話は、言葉のやりとりがさらに深める同調の極みにおいて、それぞれの過去を共通の記憶をもとに再構成してゆく。この「遊戯的対話」では、対話の維持にかかわる言葉の応酬の自律性そのものが論理の曖昧な主張や言いがかり、説得力を欠く見解を次第に排除し、言葉による「共通の過去」の再現に収斂してゆく。それぞれが過去になした行為の意味は、「共通の現在」において間主体的に再発見されるのである。拷問は、会社の後継者として育てられ「我有化」を内面化した自己にとって必然的行為であったこと、その自分が戦後の民主的社会への適正を欠くことを自覚したフランツは、劇の最後の場面で、癌に冒され余命いくばくもない父親とともに自死することを決意する。この死の選択には、従来専門家のあいだでも様々な解釈が施されてきた。だが、サルトル演劇全体を視野に入れ考察を重ねてきた本研究の成果に照らせば、生命を倫理の無条件の価値としないサルトルにおいて、死の選択という結末は決して不意に導入されたものではないことが分かる。サルトルのモラル論は、生命を絶対の価値とはしない。それに代わるのが自由の擁護である。フランツの決断が示しているのは、自由な意志から自らの生命を放棄することで、自分の我有化の対象となる他者の自由を擁護するという意志であろう。彼の倫理的決断をカント的普遍主義に則って普遍化することは不可能である。行為の規範は自由な主体である個人を

起点に、「状況」と「対話」に基づいて創出されるものであり、「内面生の純粋主体」もまた具体的状況における対話を通じて創出されるものなのである。

(6) 2009年10月9日に研究代表者が主催したシンポジウムでは、以上の研究成果を発表し、さらにサルトルのモラル論に関する優れた研究を続けている国内の研究者たちと次のような問題を今後の研究課題として共有した。すなわち、サルトルのモラル論は抽象的倫理を排し、具体的状況において自由を目的とする価値の創出を目指す。問題は、自由を抑圧する要素をいかに見だし、人間相互の自由の基盤となるものをいかに探求するかにある。「対話のモラル」を探求する本研究の観点から言い換えれば、「対話」を可能にする他者との「対等な関係」や「共感」はそもそもいかに可能なかが問題となるのである。

サルトルが手がけた最後の戯曲、エウリピデスの悲劇を脚色した『トロイアの女たち』(1965)の分析を通じて、本研究ではこの難問にも一つの展望を開いた。戦に敗れてギリシアに支配されるトロイアの女たちの悲惨を描いたこの作品は、古代から現代まで全世界で繰り返し上演されてきた芝居である。サルトルがこの戯曲の脚色を手がけたのも、アルジェリア戦争を背景とする同時代の文脈において作品を再現するためであった。戯曲を現代的にアレンジしたサルトルは、だが『蠅』で行ったような大胆な改編をこの戯曲の脚色に施してはいない。『トロイアの女たち』には『悪魔と神』で実在を否定された神が原作に忠実に登場するのである。しかし、現代ではすでに信仰されていないギリシアの神々を舞台に登場させることで、サルトルは、神々も人間と同様、自らの意志とは無関係にその意志を越えた「世界」の理解不可能性、予見不可能性に翻弄される存在であることを示したのである。フィンクが「遊び手のいない遊び」と表現した「世界」を、サルトルは「遊び手のいない遊び」を遊ぶ演劇において、遊ぶ人間を通して直観させる。いかなる「本質」によってもあらかじめ規定されない世界内存在としての自由な人間とは、「世界」の偶然性、不条理のなかに投げ出された、存在しつつ存在を全的に肯定されない存在なのである。この直観が、実存主義的倫理における「自由な対自」の相互性の基盤となるだろう。

現代の口語表現で戯曲を制作してきたサルトルが、詩的な言葉づかいと反復のレトリック駆使し、登場人物の声を通じて表出したのは、意味を奪われた生を生き延びる女たちの苦しみである。サルトルの表現を用いれば、「苦しみとは苦しみの拒否」であるゆえに、

戯曲の再現が喚起する「共感」とは、なにより苦しみを拒否する共通の感情である。合理的理性が戦争や支配を肯定しないことは自明である。しかし、歴史上数々の戦争が繰り返されてきたこともまた事実であろう。自他を「同じ人間」として認知する普遍的理性の働きは抽象的であり、集団に自己を、自己に他者を同化する圧力の前ではしばしば力を失ってしまう。理性の働きを具体的に基礎づけ、それぞれの状況にいる目の前の他者をかけがえのない他者として受容する率直な心性こそ「共感」であるとすれば、本戯曲は観客を対話へと誘う「共感」の倫理的可能性に賭けられている。サルトルのモラル論における「自由」とは、具体的に感受される苦しみからの自由であり、自由の実現のために、価値を共同創出する他者の自由に関わられた自由である。「贈与」ではなく「共感」を動機とする「呼びかけとしての文学」の倫理的可能性がここに再び開かれている。「呼びかけ」とは自由のために、他者の自由へと呼びかける声である。このとき、「アンガジュマン」はこの声への応答を示すことばとなる。

ともに「遊戯／演技」する存在はその活動において「世界」を直観し、根拠をもたない、意味を失った存在としてそこに「共感」の基盤を見いだす。それぞれがそれぞれに対して異質な他者であると同時に、「世界」の前で対等な人間は「共感」に基づいて対話を交わす。たとえ現実社会で対立する立場にあろうとも、この「遊戯的關係」に参加するがぎり、「遊戯的対話」は意味からなる言葉の自律性に導かれ、共有できる意味を存在者相互の価値として創出するだろう。「遊戯的關係」は、本来「世界」には属さない現実の「権力關係」を括弧に入れることから、「虚構」として導入することから可能になる。

本研究の最終成果は「対話のモラル」をこのような構造をもつものとして位置づけ、提起したことにある。さらに「遊戯的対話」の有効性について検証を重ね、その一般的構造をより詳細に概念化することが今後の課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①翠川博之、サルトルのモラル論—人間・他者・歴史をめぐる、フランス文学研究 (東北大学フランス語フランス文学会)、査読無、第30号、2010、pp.57-60

[学会発表] (計2件)

①翠川博之、*Cahiers* における主体の能動性

と受動性、日本サルトル学会、2009年12月5日、関西学院大学

②翠川博之、倫理のパラドクスと回転装置、シンポジウム「サルトルのモラル論—人間・他者・歴史をめぐる」、2009年10月9日、東北大学

[図書] (計1件)

①翠川博之、サルトル演劇におけるモラルの研究、2008年度—2010年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書、論文集、2011年3月、140p.

[その他]

ホームページ等

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/French/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

翠川 博之 (MIDORIKAWA HIROYUKI)

東北大学・大学院文学研究科・専門研究員

研究者番号：60436061

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：